笹沢左保

夜の声

「平和新書」は、あなたの図書館です。この本をお読みになってのご意見、ご希望などをおよせください。

頭悩のリクリエーション、新らしい生き方の工夫、現代の探究…「平和新書」はこうした本をあなたとともに発行してゆきたいと思っております。

東京都港区芝新橋四の三四
アサヒ芸能出版KK
「平和新書」編集部

『夜の声』　平和新書

昭和38年4月15日　発行　　定価 260円
昭和38年10月15日　3版

著者　笹沢左保
発行者　兵頭武郎
印刷者　森高和彦
東京都品川区南品川5の13
(富士高速印刷株式会社)

発行所　アサヒ芸能出版株式会社
東京都港区芝新橋4の34 (TEL・581・6261)

乱丁・落丁本はおとりかえします。　製本高木紙工

笹沢左保

夜の声

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

死んだ記憶　9
雨の中の微笑　33
清志を返して　47
男妾　63
作品・死の跡　79
若すぎた未亡人　95

灰色の空間　115
身許不明の女　141
敗北の運命　157
被害者の顔　173
流れる血も美しく　189
夜の声　205

装　幀／上口睦人
さしえ／津神久三

死んだ記憶

1

私がその母娘の訪問を受けたのは、五月初旬、小糠雨が新緑の青葉を鮮烈に染め上げている日曜日の朝だった。

私が週刊誌の連載原稿を二回分書き上げて、これから一眠りしようとしている、その矢先であった。仕事場に一人暮らしの気軽さで、ドアの外での人声に私は寝巻姿のまま出て行った。

ドアをあけて入って来たのは、四十年輩の品のいい人妻ふうの女と、二十前といった清潔そうな娘の二人である。一目で、この二人の女性が母と娘であることが分かった。色の白さ、黒い髪、顔の輪郭が、そっくりそのままだったからである。

「佐々木先生ですか？」

と、その母親と思われるほうの女が丁重に一礼した。多少、とまどった表情が女の顔にあった。多分、私の寝巻姿に真っすぐ目を向けられなかったからだろう。

「そうですが……」
私も思わず、寝巻の襟をかき合わせずにはいられなかった。
「お写真なんかより、ずっとお若いので……」
人違いかと思った——とつけ加えるのを、女は口の中で濁してしまったようである。
「いや、ぼくが佐々木に間違いはありませんよ。三十一歳、推理小説を書いている……」
奇妙な自己紹介をしながら、私は腐った魚のような赤い目をゴシゴシこすった。とにかく眠いのだ。私の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ような職業の人間にとって、朝の来客はもっとも苦手である。しかも、相手が特別な用件あっての客ではないとなると、私の気持ちは一刻も早く寝床へもどりたいの一心になる。

「はあ、もう分かっております」

女は、私の眠そうな顔に気づいて、ここへ来た目的を急ぐように早口になった。

「実は、おりいってお願いしたいことがありまして……」

「はあ」

私は、女の縋るように切実な目つきを見て、ここで立ち話というわけにも行くまいと思った。私は睡眠はあきらめて、この母娘の話を聞いてみるという気になった。というのも、私が女の連れて来た娘に興味を抱いてしまったからである。それは変な意味での興味ではない。推理小説を書く者の意欲をそそる点で、その娘の印象は強かったのだ。

娘の目の焦点は定まっていなかった。一見して常人とは変わりないのだが、その目には思考の行方というものがなかった。つまり、何を考えているのか察しがつかないのである。それに、娘は全くの無表情であった。愁いに沈みきっているようにも見えるし、また、無感動な顔つきとも言えた。娘が美貌の持ち主であるだけに冷血動物のようなヌメヌメとした感じだった。

私は、この娘が精神異常者か、一種の痴呆症患者ではないかと直感した。そして、その推察は間違っていなかった。

私は母娘を応接間へ招じ入れた時、母親だけがお礼を述べ、頭を下げるのだが、娘はただ棒のように突っ立っていて、母親のあとに従うことっきり知らないのである。

「お嬢さんのことで何か？」

私は、母親をソファにかけさせると、単刀直入に聞いた。

「はあ……」

母親は悲しそうな、そして暗い目で頷いた。

「実は五日前の五月二日の晩から、突然、娘はこのように変わってしまったのです」
「何か原因があるのですか？」
「それが、何分にも本人が言わないので、わたしどもに原因の見当がつかないのでございます」
「本人が何も言わない？」
「はあ。お医者さんに診ていただいたのですが、ひどいショックを受けたために一時的に記憶を喪失してしまったのだろう、というだけで、それ以上のことはもう少し経過を見てからでないと専門家にも診断がむずかしいとかで……」
「ほう……」
私は一体、この母親が何を相談に来たのか迷っていた。強い衝撃によって一時的な記憶喪失症になった娘――しかも、それ以上のことは専門家にも分からないという。私は小説は書くが、決して医学の専門家ではない。そんなことを持ち込まれても、私としては目を白黒させるだけである。
「それで、ぼくにどんなご用件で……？」
私は半ば面くらいながら言った。
「大変厚かましゅうございますが……」
母親は背をまるめて頼み込むのである。
「先生に、この娘が受けたひどいショックというものが、どんなことのために与えられたのか、お調べ願えたらと思いまして……」
「ぼくが、それを調べるのですか？」
「はあ……あのう、費用の点ではご不自由ないようにいたしますし、大変失礼な言い分でございますが、先生へのお礼のほうも……」
「そんなことはどうでもいいですが、一体何のために衝撃の原因を調べたりするんですか？　例えばそれが分かったとしても、お嬢さんの記憶が回復するわけではないでしょう……？」
「いいえ、お医者さんのおっしゃるには、衝撃がどのようなものによってなされたか、そして、その程度、心理状態などをつかむことが出来たら、分析治療の可

能性も出てくる、とのことでございます。それで、わたしどもも、なんとか娘の受けた衝撃の原因を知りたいと思いまして……」

「しかし、弱ったな。ぼくは警察官でもないし、探偵でもありませんからね」

「そこをなんとか、ご無理願って……」

「ぼくは、こんな相談を受けたのは初めての経験なんですが、何でまた、ぼくに白羽の矢を立てる気になったんです？」

「実はこの娘が、あなたのご本を愛読しておりましたんです。それで、あなたのお気持ちだったら、少しでもこの娘の眠っている記憶を刺激して下さらないものかって……」

母親の情愛と憐みの眼差しを、自分の娘に注いだ。娘は死んだような目を、宙に据えたまま、凝然と動かさなかった。勿論、私が誰であるかも娘には判断出来ないのだ。

私は当惑しながらも、何か胸に迫るものを感じた。私には、この娘の思い出しようのない陰の記憶を探り出す義務があるのではないかと思った。それはかつて私が書いた小説をこの娘が熱心に読んでいてくれたという。心のつながりのようなものである。私はこの娘を、まるっきりの他人とは思えないような気がした。

あるいは私の小説が、なんらかの形で彼女に衝撃を与えたのではないか、というような危惧も、心の片隅にあったのである。

「五月二日の晩、お嬢さんの身辺にどのようなことがあったか、それも分かっていないんですか？」

私は気をとりなおして質問した。

「そうそう、まだ名前も申し上げないで、大変失礼いたしました」

母親は改めて、両膝に手を置いた。

「わたくし、江田八重子と申します。娘は克子でございます。主人はユニオン貿易の横浜支社長をしておりまして、親子三人、世田谷成城に住んでいるんでございます」

江田夫人は簡単に、家族について紹介をすませた。克子というこの娘は、どうやら一人っ子らしい。それだけに克子の異変は両親にとって心痛の種なのだろう。

「五月二日の夜、克子は下北沢の友達の家へ行くと言って家を出まして、そうでございますね、十一時少し前でしたか、真っ青な顔をして帰ってまいりました。その幽霊みたいな顔に驚いて、わたしと主人が代わる代わる問いただしたんですが、その時はもう克子は口をきけなかったのです。翌日になると、克子は何も思い出せませんでした」

「なるほど……。すると、その五月二日の夜に、お嬢さんが何か異常な出来事に出合って激しい衝撃を受けた、と解釈していいわけですね？」

「はあ。下北沢の友達のところへ行くと言って出掛ける時は、何の変わりもない克子だったのですから…」

「その下北沢の友達というのを、奥さんはご存知なんですか？」

「はあ、あのう……この三ヵ月ばかり、下北沢のお友達のところへ行くと言っては、ちょいちょい出掛けるんですが……そのお友達の名前や、またどういう方なのかは、わたくし一度も聞いておりませんの」

「五月二日の晩、家へ帰って来られた時のお嬢さんには、その幽霊みたいな青い顔をしていたということのほかに、特に変わった様子はなかったですか？」

私は当然、克子が夜道で一人あるいは数人の男に暴行されたという場合も想定したのである。こういうことから、恐怖と絶望に記憶を喪失するほどの衝撃をうけた、とも考えられるのだ。

「と申しますと？」

母親には、私が聞かんとするところが通じなかったらしい。

「つまり、お嬢さんの服装が乱れていたとか……傷ついていたとか……」

私はそう説明をつけ加えた。

「いいえ……」

母親は考え迷わずに首を振った。
「克子は袷の和服姿でしたから、乱れていればすぐ分かりますが、帰って来た時の感じでは、着崩れさえもしてなかったようです」
と、私の想定はあっさり否定された。合意の上での情事であるならばともかく、暴力で犯された和服の女が、着崩れも見せずに逃げ出して来られるはずはない。
「お嬢さんは、どこかにお勤めですか」
私は思索の方向を変えて、そう訊いた。
「いいえ、半年ほど前までは主人の会社に勤めておりましたんですが、どうも生来が身体の丈夫なほうではありませんので、勤めを辞めさせまして、週に三回、お料理を習わせに通わせてます」
「すると、日常お嬢さんが接しておられる人というものには、限界がありますね？」
「そういうことになりますですね」
「特に親しいという知り合いは？」
「はあ。克子はつき合いがいいほうではないものですから……交際の範囲も狭くて。最近親しくしていたのは、さっき申し上げました下北沢のお友達で……」
「しかし、その下北沢の友達というのは、何者であるのか分からない……？」
「はあ……」
「ところで、お嬢さんは、こうしてぼくたちがしゃべっていることの意味は、分かっているんでしょうね」
「それはもう、別に気が狂ったというわけではないんですから……」
と、母親は私から視線を娘のほうに移した。試しに娘に話しかけてみろ、というつもりらしかった。
私は初めて、正面から克子を凝視した。克子は相変わらず、無感動に表情を硬着させたまま、陰欝に沈黙を続けていた。
ふっくらと柔らか味のある美しさだった。いかにも女であるというような、甘さと弱々しさが意外に豊かな克子の肢体の曲線ににじみ出ていた。

私は克子に対する同情を禁じ得なかった。タイトスカートからこぼれる彼女の腿の白さにも、触れられるのを待っているような胸の隆起にも、そしてセーターによって強調されている胴のくびれも腰の厚味にも、春を迎えた女の新鮮さが盛られてあった。だが、今の克子のそれらは外見だけにすぎず、彼女の『女』は死んでいるのも同然だった。

「お嬢さん……」

私は克子に声をかけた。

「……」

克子は目だけで、何か用かとたずねた。別に私を恐れるふうもなく、まるで人形か何かに相対するような反応のない顔つきだった。

「お母さんの言う通り、あなたはやはり、何も思い出せませんか？」

「……」

克子は機械的に首を振った。全く記憶はないという意味らしい。

「それで、今のあなたは、どんなお気持ちなんですか？」

「生まれ変わったような……夢を見ているような……わたくしが克子であるという確信が持てないんです。父や母は肉親だと感じますし、ずっと昔のことなら思い出せそうな気もするんですけど……」

「その下北沢の友達っていうのは、考えも及びませんか？」

「下北沢に友達がいるなんて、誰かが勝手に想像して作り上げたことのように思います」

「ぼくの小説も忘れてしまいましたか？」

「確かに、あなたの本はわたくしの手もとに何冊もあります。でも、あなたのお名前さえ覚えておりません」

「あなた自身の年は？」

「母が二十一だと教えてくれましたので、そう思っております」

「自分が何かにひどく驚いたとか、恐ろしかったとか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com